

氏名	しも 下 定 雅 弘
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 365 号
学位授与の日付	平 成 11 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	白氏文集を読む

(主査)

論文調査委員 教授 興膳 宏 教授 川合康三 教授 礪波 護

論 文 内 容 の 要 旨

一、白居易に対する私の見方

白居易の人生を見る場合、通常、兼濟・独善という語がその基準となっている。「兼濟」とは、「ひろく人民を救済する」の意であり、また政治家として活躍し成功することでもある。「独善」とは、(白居易が江州で確立した「独善」の意義としては)「自己一身の快適」の意である。白居易自身、「丈夫は一生に二つの志有り、兼濟と独善とは得て并せ難し」(「秋日与張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌凡二百三十八字」, 大和七年)というように、「兼濟」と「独善」の二つを得ることを人生の理想と考えていたから、この語を用いて、白居易の一生と白居易像の輪郭を描写することは、白居易に即した適切な立場だろう。

中国では、白居易の前半生は、兼濟に生きた人民詩人として讃え、諷諭詩と「与元九書」で展開される「詩道」の理論を評価する。しかし、江州貶謫以後の後半生は、消極的・退廢的だとしてほとんど評価しない。これが、共和国成立以後、最近までの、ほぼ一貫した白居易への見方である。

日本では、白居易の人生は、兼濟から独善へと大きく変化した、あるいは、前半生は政治に生きたが、後半生は、詩と仏教に生きたという見方が大勢である。平岡武夫・花房英樹・堤留吉、みなそうである。近時、太田次男が、白居易の仏教への傾倒につき、どれだけ本物かと疑念を表し、後半生も官僚としての生き方を通しての述べているが、論の本格的展開はなされていない。

したがって、日本でも、中国でも、兼濟から独善へという見方については、ほぼ同じである。ただ日本では、中国と異なり、後半生を低く評価することはない。

私も、白居易の一生の変化の大筋は、これまでの見方の通りだと思う。しかし、白居易の詩文の実際は単純ではない。白居易の詩を読んでいると、わかい時の「兼濟」の中にも「独善」への愛好が見え、後半生の「独善」の中にも「兼濟」への志がしばしば頭をもたげている。この矛盾を把握することにより、白居易の詩文の味わいはずっと深まる。それが、私の基本的な立場である。

また白居易の姿を映像としてとらえると、平岡武夫の場合は、天下的世界観の端正な具現者であり、花房英樹の場合は、ヒューマンイズムの根源に向けて自己を徹底していく求道者である。二人の白居易は、あまりに典雅で純粹である。私の白居易はそうではない。白居易は、人生のいずれの時期においても、自己の欲求を可能な限り実現しようとした、自己をきわめて愛し大切にしたい人である。大官僚であり、同時に比類ないエピキュリアンである。その両面を統合する所の、激動する時代に、自己に忠実に生きた、しなやかで、たくましい巨人である。それが私の白居易像である。

二 私の研究の方法

私が、白居易の詩文を読む方法は、上述の白居易観と直結している。その主なものは、次の三者である。

一、詩文のスタイルのちがいによる表現機能の相違に留意する。二、白居易の人生の各時期の処世の諸概念に着目し、そ

の変化・比重・配合等をたしかめる。三、白居易の一生の思想の変化を、identityの形成という視点で見る。

第一の方法について。

詩文のスタイルと内容との間には密接な関連がある。

詩は、古体と近体で、その表現機能が異なり、また古体の中でも、五言と七言では、その表現の目的も感情もちがう。簡単にいえば、古体一特に五言古詩は、士大夫としての衿持を支えとして詠じられるもので、伝統的な儒家思想や老荘思想を基盤とする精神や感情の表出であることが多い。これに対して近体すなわち律詩は、そのような思想性の強さ、言い換えれば一種の観念の縛りからは自由であり、白居易の感情が、その時々のできごとにそくして、古詩よりも率直に詠じられている。

『長慶集』（那波本の巻一から巻五十まで）および『後集』以後（那波本の巻五十一から巻七十一まで）の詩の、古体・近体の制作数の割合を見ると、『長慶集』では、四三対五七であるのに、後者では一八対八二となっている。すなわち、『長慶集』では、古体への情熱が、近体へのそれと拮抗しているが、『後集』以後では、古体への情熱は減退し、律詩が圧倒的多数を占めるようになっていく。

また、『長慶集』では、詩は、諷諭詩・閑適詩・感傷詩（以上、古体）・律詩の四つに分類されていたものが、『後集』以後では、格詩（五七言の古体）・律詩の二分類となっている。

この分類の単純化は、古体が激減し、律詩が圧倒的多数を占めるようになることに対応する現象である。古体の内容を見ると、諷諭の詩は皆無といってよく、それまでの悲哀の勝った感傷詩風の作が減って、ほとんどが、閑適詩風の作となってしまっている。このために、古体を分類する意義が失われ、格詩・律詩という単純な分類になったのである。『長慶集』から『後集』以後の創作に見られる、この形式上・数量上の変化は、朝官としての使命感を軸として生きていた時期、すなわち兼済の時期から、要路の地長安を敬遠して、閑居に楽しみを見いだして生きた時期すなわち独善の時期への、精神の変化の現れである。

そしてまた、同じ時期に、これら各々の詩体は、その表現機能の相違によって、白居易の異なる方向に向う精神を見せてくれる。江州時代、閑適詩の白居易は、あたかも廬山での清澄なる暮らしに満足しているかのようだが、しかし、感傷詩の白居易は、ひたすらに華やかな長安での日々を思っている。洛陽での格詩を読めば、白居易は詩と酒の日々を堪能しているかのようだが、しかし律詩を読めば、長安での活躍の日々への思いが、くりかえして歌われている。

こうして、その一生における精神の変化と詩体の変化はぴたりと呼応し、同じ時期において、異なる詩体は、異なる精神の方向を表現していること、これを明瞭に示したのが私の研究である。

文のスタイルの別は、詩のように単純ではない。私は、文についても、できるだけ、詩の明解さに近いアプローチができることを求めて、古体か近体かの判定基準を数量化することを試みた。その方法は、一々の文について、対偶の使用率と四字句の使用率をチェックすることにより、駢散の度合を示すというものである。

そして、この結果を、翰林制詔と中書制詔を読む時の、基本的な視角とすることにより、白居易の制の文学が、翰林制詔から中書制詔へと、大きな発展を遂げていること、それが白居易の官僚としてのidentityの熟成と深く関わるものであることを明らかにした。

第二の方法について。

私は、白居易が各時期に抱えていた問題を見つめつつ、白居易の各時期の詩文に、三教すなわち儒・釈・老に基づく諸語（諸観念）が、どのように現れているのかを調べてみた。その大要は、こうである。

諫官の時代には、「兼済」の信念が白居易を支えている。この時期には、この信念に伴う「直」の語がめだつ。その詩への適用が「詩道」の理論である。

江州においては、「独善」の語が「兼済」とはりあう地位を獲得した。そして、これに即応する詩の四分類の概念が考案された。このワンセットの理論は、諫官としての使命感に生きたことを誇るとともに、閑適への愛好を基礎づけ合理化するものである。そしてまた、この時期の苦痛を慰撫するために、「知足」「外物」「窮通倚伏」等の老荘的諸観念が盛んに用いられ、詩への耽溺を合理化するために、「詩魔」の語も用いられる。

『後集』以後の時代では、「中隱」の観念が、白居易を支えている。これは、朝官としてのidentityを保持しつつ洛陽閑居を楽しむという、自己の生活実態を追認し肯定する理論である。これに対応する詩論が「序洛詩」の詩論である。

仏教の語は、『後集』以後のはじめには、俗念の強さを克服すべく「無念」への関心が深まるが、やがて、年をとり、身体の衰えが進むとともに、来世を見つめた「他生」「弥勒弟子」等の語がめだつようになる。また、詩作への耽溺を合理化するために、「詩魔」に加えて「詩債」の語を頻繁に使うようになる。

そして、最晩年には、「放言綺語」「転法輪之縁」の語が繰返し登場する。文集を何度も奉納し、死後の生命を渴望した自分の生き方を、白居易はこの理論で肯定し支えた。

白居易は、その生き方の重点を、「兼濟」から「独善」へと大きく変化させたが、「独善」の面での諸概念の状況を見れば、積老の中の積と老の比重が、『長慶集』では老荘が重く、『後集』以後では積が重みを増している。

こうして、白居易はその生涯のいつの時期にも、自己が最も快適に生きることを支える観念を、三教から抽出・融合して、活用した。「詩魔」「詩債」「中隱」のように少なからぬ語が考案され、「独善」のように意味をずらせ、また時には、「詩債」と「転法輪之縁」のように、本来無縁の観念を結合させて、白居易は、自分の生きかたを支えつづけたのである。

第三の方法について。

本研究で、白居易の官僚としての意識を考察するにあたっては、identity-identifyの概念を適用している。これは、いうまでもなく、E・H・エリクソンの用語である。本研究では主として、エリクソン『自我同一性 アイデンティティとライフサイクル』（小此木啓吾訳編、誠信書房、一九七三年初版）の「自我同一性」の問題の序論に、「最後にそれは特定の集団の理想と同一性との内的な一致」といわれるのを意識している。すなわち、本研究では、identity-identifyを、唐朝の朝臣としての自己認識、またその自己認識の獲得というほどの意味で用いている。本研究は、一言でいえば、この視点により、白居易の兼濟・独善の思想とこれを圍繞する諸観念および感情の変化の様相を追跡したものである。

三 具体的な主張

以上の白居易観をベースとして、本研究は、以下のような具体的な主張を行なっている。

1. 白居易の意識における兼濟と独善の比重の変化を基準として、江州司馬時代を、兼濟と独善とが並立した時代と把握し、杭州刺史時代を、独善の比重が大きく高まる時期と見て、白居易の思想の転換点を、二つの時期に設定している。この見方は、白居易の一生を、江州左遷後も、兼濟に生きようとしたと見る『新唐書』、逆に江州左遷後は独善に生きたと見る『旧唐書』のいずれとも異なる。また、杭州赴任が自ら望んでのものか、あるいは左遷かという議論を止揚するものである。この問題は、主として、前編第六章「与元九書をどう読むか」・中編・終章「白居易の一生をどう見るか？」で論じている。

2. 1の主張の一環を形成するものとして、下邳退居時代も、白居易の諫官としての意識は継続していることを主張している。この主張は、主に、前編第一章「諷諭詩」・同第二章「翰林制詔」・同第三章「閑適詩」および同章「補記」でなされている。

3. 同じく1の主張の一環を形成するものとして、中書舎人を経験したことにより、長慶初年、白居易の朝臣としてのidentityは完成され、これにより、杭州赴任以後、独善へと大きく傾斜することが可能だったことを主張している。この主張は、主に、前編第七章「中書制詔」・中編第一章「転形期」・終章「白居易の一生をどう見るか？」でなされている。

4. 白居易の人生観の変化を追跡するにあたっては、三教という観念的な枠組みから見るのではなく、白居易の精神を支える諸語・諸観念の、各時期の配置と変化を具体的に見た。その調査結果の概要は上に述べた通りであり、私の、白居易の人生観の変化についての見取り図を証明するものとなっている。この作業は、主に、前編第三章「閑適詩」・中編・後編第四章「詩における老荘と仏教」・同第五章「文における老荘と仏教」でなされている。

5. 白居易の一生は、兼濟から独善へと大きく比重を変えたが、いずれの時期も、その精神は一方に安定していたのではない。この問題に焦点をあてて、中編第三章「白居易の独善（下）」は、兼濟の時代にも、独善へ自らを開放する観念を白居易は持っていたことを指摘している。また、後編第三章「宰相になりたかった白居易」は、独善の時代にも、兼濟への思いは消えていないことを明らかにしている。

6. 白居易の生き方は、兼濟から独善へと大きく変わったが、いずれの時期もその精神は、一方に固定していたのではなく、相反する方向に向かう矛盾を内包していた。白居易の詩文は、この精神の葛藤をよく示している。本研究は、このことを、異なる詩体は異なる精神・感情を表現するという見方を採用して、明らかにしている。この問題を主に論じているのは、前編第三章「閑適詩」・同第四章「感傷詩」であり、同第五章「白居易と江州」は、もっぱらこの方法によって、江州時代の白居易の意識の横断面を示している。また、後編第一章「格詩」・同第二章「律詩」は、同じ方法により、『後集』以後

の時代の白居易の精神の様相を立体的に明らかにしている。

最後に、本研究は、白居易の兼濟・独善をめぐる諸問題の解明を主要課題として、『白氏文集』を読むことに専念している。よって、白居易と白居易の文学の歴史的社会的な位置づけについては、十分な追究を行っていない。この問題は、白居易だけではなく、柳宗元・韓愈・劉禹錫・元稹ら、元和期の主な文学者たちの生き方と文学の全体を視野に入れた研究で、明らかにしたいと考えている。

論文審査の結果の要旨

唐の詩人白居易(772~846)は、その七十五年の生涯に膨大な量の詩文を創作し、それらを数次にわたり自らの手で編集して、後世に伝えた。彼の文集は最終的に七十五巻の形にまとめられたが、うち七十一巻が今日に伝えられている。いわゆる『白氏文集』であり、わが国にも早くから伝来して、平安朝の文学に大きな影響を及ぼしたことはよく知られている。(なお、『文集』は従来「もんじゅう」と読みならわされてきたが、実は明治二十年代までは「ぶんしゅう」と漢音で読まれていたことが近來の研究で明らかになり、論者もその説に従って「ぶんしゅう」と読んでいる)、『白氏文集』の研究は、中国・日本のいずれにおいても、長い時間にわたる厚い蓄積がある。本論文は、それらの先行する研究成果を批判的に咀嚼しつつ、あくまでも自分の視点による作品の精緻な読解を通して、白居易文学の全体像に迫ることを目指したものである。ある時期の作品や、ある特定の詩形に照明を当てるのではなく、全生涯にわたる全ての作品への目配りを怠らないところに、論者の強い意気込みをうかがうことができる。

白居易の人生観は、「兼濟」と「独善」という二つの対照的なことばによって特徴づけられる。これらの語は、彼の文学観を語った「元九に与うる書」にその概念が明らかにされているが、「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす」という『孟子』のことばにもとづいて、「兼濟」は「ひろく人民を救済する」こと、「独善」は「自分の身を快適にする」ことを意味する。この二つを全うすることが、彼の人生の理想だった、と論者は考える。白居易の前半生は順風満帆のエリートコースをたどったが、四十四歳の年に江州司馬に左遷されて、はじめて大きな挫折感を体験する。江州時代に至るまでの彼の人生と文学は、「兼濟」の方向が大きな位置を占めていて、その最たる作品が政治・社会への厳しい批判精神に貫かれる「諷諭」詩であり、とりわけ「新樂府」五十篇は自他ともに認める代表作である。しかし、後半生にあっては、「兼濟」的な色彩は薄れて、「独善」の方向が顕著になり、その文学的表現として、身の生活に材を求めた「閑適」の詩が増加する。この「兼濟」と「独善」の文学における表われかたをいかに評価するかが、白居易の文学を研究するに際しての大きな課題になる。

現代の中国では、「兼濟」に生きた前半生を人民詩人として高く評価する一方で、「閑適」の傾向を強めた後半生を消極的・退嬰的としてほとんど評価しない趨勢が長くつづいた。また、日本では、白居易の人生における「兼濟」から「独善」への変化を、彼の仏教信仰と結びつけて、前半生の政治中心の生き方から後半生の詩と仏道中心の生き方への転換として理解する見方が有力であった。論者は彼の詩文を細心に検討した結果、それら先行する見方のいずれにも与せず、前半生の「諷諭」中心の詩の中にも「独善」への志向が見え、後半生の「閑適」をこととする詩の中にも「兼濟」への志向がうかがえることを重視している。士大夫としての白居易の人生は、確かに前半生の「兼濟」から後半生の「独善」へと様相を変えたが、彼の各時期の詩を逐一跡づけてゆけば、その内部では絶えず現実の自分の状況と相反する方向へ向かおうとする葛藤が認められる。こうした作品の深層での矛盾を凝視することを通じて、白居易文学への理解はいつそう深められる。論者のこの方面での探索は、白居易の人と文学をより奥行きのあるものとして理解することに成功している。

唐詩は、形式の面から見れば、大きく古体詩(非定型詩)と今体詩(定型詩)に二分される。これらは内容面でもそれぞれ機能を異にしており、一般的に古体詩は士大夫としての自覚にもとづく思想や感慨の表出を特色とし、今体詩は折に触れての即興的な感情表現を特色とする。白居易は江州時代に書かれた「元九に与うる書」において、自分の詩を「諷諭」「閑適」「感傷」(以上、古体詩)及び「律詩」(今体詩)の四種に分類しているが、『白氏文集』のうち、前半生の作品を収める『長慶集』は、事実この分類法に従って作品を排列しており、白居易自身はこのうちで「諷諭」詩を最も価値あるもの、「閑適」詩をそれに次ぐものと認めている。ところが、後半生の詩を収める『後集』になると、一転して「格詩」(古体詩)と「律詩」の二分法に単純化してしまった。『長慶集』から『後集』への分類の変化には、白居易の文学のありかたそのものに

関する本質的な問題が暗示されている。この点に着目したのが、本論文の大きな特色の一つである。

分類法の変化だけでなく、古体と今体の作品数にも、前半生と後半生では顕著な変化が見られる。すなわち、『長慶集』では古体と今体の数がほぼ拮抗していたが、『後集』になると、作品の約八割という圧倒的な数を今体の作が占めるようになる。この数量上の変化は、後半生の詩において、「諷諭」と「感傷」の作が激減して、ほとんどが「閑適」風の作になってしまったことによる変化でもある、と論者はいう。そして、それはまた官僚としての自負と使命感を軸として生きた時期から、閑居に楽しみを見いだすようになった時期への精神の変化の現われでもあった。詩の量的な変化が、質的な変化と有機的に結びつけて把握されようとしているところに、論者の着眼点の新鮮さが感じられる。

このほか、従来は「長恨歌」と「琵琶引」のみが有名で、あとはほとんど顧みられることのなかつた「感傷」詩にも全般的に光を当て、詳細な検討を加え、「諷諭」や「閑適」に対置されるその独自の価値を主張していることも、白居易文学の研究に新たな視座を提供するものと認めてよい。また、長く未開拓のまま放置されてきた白居易の散文のうち、百五十篇近くを占める「中書制誥」について、その文体を丹念に検討した結果、「旧体」「新体」と称される二つのスタイルに関して、前者はいにしへの『尚書』風の体、後者は近來の新しい体すなわち駢体という、内外の諸説を覆す新説を提起しているのも、十分な説得力を感じさせる。

このように、積極的な意欲に満ちた本論文は、内外における白居易研究を一步前進させた成果として高く評価できる。ただ、難点をいえば、白居易の詩文に何が書かれているかについては詳しく論じられているが、それらが唐詩の流れの中で、文学作品としていかなる特色と魅力を備えているかについては、いまだ行き届いた分析がなされているとはいえない。また、白居易の作品を読むためには、わが国に存する金沢文庫本等の抄本の長所を活用する必要があるが、その点でいささか配慮を缺く恨みがある。論者がそうしたことに留意しつつ、今後もさらにより高度の白居易研究を展開されることを希望したい。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1999年1月11日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行なった結果、合格と認めた。